

日本国国防海軍第1空母 打撃群はいふり世界転 移

ズデーテン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

改憲した日本は原子力空母、原子力潜水艦を建造、空母打撃群を編成する。第1空母打撃群はアメリカへ演習に向かう途中で突如として謎の光に包み込まれる。そして光が消えるとそこは…

目次

壓倒的技術差	17
開戰	9
接觸	1

接触

「くそ、ハハはどこだ!？」

第1空母打撃群司令官の村上淳仁むらかみあつひと小将がそう叫ぶ。第1空母打撃群の編成は以下の通りだ。

大和型原子力航空母艦1番艦大和

金剛型ミサイル駆逐艦1番艦金剛

摩耶型ミサイル駆逐艦1番艦摩耶

秋月型駆逐艦1番艦秋月

朝日型駆逐艦3番艦霧虹

鳳翔型原子力潜水艦1番艦鳳翔

摩周型補給艦3番艦諏訪

旗艦は大和であるため、村上は大和にいる。大和型と鳳翔型はアメリカによる技術支援が行われ、それぞれ4隻建造された。

「司令・レーダーに何か映っています!!」

「何?どこだ!」

「方位351、距離70!」

「F-35を偵察のために2機上げる!」

「はあ…いくら何でも学生である私たちにこの任務を任せますか…?」

航洋艦晴風副長の宗谷ましろがため息をつく。

「仕方ないよシロちゃん、海の安全が確保されないと私たちだって海洋実習できないんだから」

晴風艦長の岬明乃がそう答える。

「とは言ってもこんな広い海でターゲットを探すなんて不可能ですよ!空からでも探さない限り!」

「水素やヘリウムを使わない空飛ぶ船って作れないんですかね」

記録員の納沙幸子がつぶやく。

「あんなもの空想の産物だ…馬鹿馬鹿しい」

ましろがそう返す。すると、どこか遠くから音が聞こえてきた。

「ん?」

「なんの音でしょうか?」

艦内がざわつく。

「左舷方向空から何か接近してきます！」

見張り員の野間マチコが艦橋に報告する。

「空から？飛行船かなー？」

のんきなことを言いながら明乃が双眼鏡で報告された方角を見る。

「え…？何あれ…？飛行船じゃない!!」

その言葉に艦内は大騒ぎする。

「そんなわけ！飛行船以外で空を飛べるものがあるわけな…！」

ましろの言葉を遮るようにしてF-35が2機晴風上空を通過し、轟音が響く。

「きゃあー！」

「何この音！」

「何!?宇宙人!?」

エンジンの爆音に思わず誰もが耳を塞いでいた。

「やっぱり宇宙人だー！」

幸子がそう騒いでいるのを横目に明乃は晴風の周りを旋回しているF-35を双眼鏡で見ている。

「いや、違う！人が乗ってる！」

「人が!?じゃあ何!?ブルマーの新兵器!?」

「でも、レーダーには何も映ってませんよ?」

電測員の宇田慧が艦橋に報告する。

「そんな…! やつぱりUFOなのか?!」

理解できない状況に、ましろがらしくないことを言う。

「シロちゃん落ち着いて! とりあえず無線で呼びかけてみよう! つぐちゃんお願い!」

「了解です! こちら航洋艦晴風です。貴官の所属と目的を教えてください!」

電信員の八木鶴が無線で呼びかける。しかし、

「応答ありません!」

応答はなかった。それもそのはず。晴風とF-35では無線の周波数が違うのだ。

This is Japan NAVY, this is Japan NAVY,
tell me your affiliation and purpose,
over. (こちら日本海軍、こちら日本海軍、貴艦の所属と目的を教えてください)
F-35側も晴風に呼びかけていた。2機のF-35のパイロットはそれぞれ、佐藤
中尉、大崎中尉だ。

「応答なし、か…! しかしなんでこんな古い艦が…」

晴風は陽炎型駆逐艦である。70年以上前に全艦退役しているはずだ。

「タイムスリップでもしてしまったのか…?」

「しかし変な塗装だな。建造当時は日本は戦争真っ最中、あんな見つかりやすい塗装を施すとは思えない。」

「しかも艦体に『Y467』と書かれているが何故アルファベットが使われているんだ…?」

『ネプチューン1、ネプチューン2、現状を報告せよ』

大和から無線が入ってくる。

「こちらネプチューン1、レーダーに映っていたのは陽炎型駆逐艦、艦体には『Y467』と書かれています」

『陽炎型駆逐艦だ?!?そんな訳が…我々はタイムスリップでもしてしまったのか?!?』

「いえわかりません。無線も通じないので船で直接接近した方がいいかと…」

『もしそれで攻撃されたらどうするんだ?!?相手は帝国海軍だぞ!』

「あの、先ほども申し上げましたが艦体には『Y467』と書かれています。そんな艦は存在してないはずですよ!」

『…一度帰還せよ』

「了解!」

「行っちゃった…」

明乃が双眼鏡を目から離し、そう呟く。

「一体何だったんでしようか？」

幸子が首を傾げる。

「とりあえずブルマー本隊に問い合わせてみよう！」

「あの！ブルマーからです！航洋艦吹雪が6隻の国籍不明艦隊がこの付近を航行するのを目視したそうです！現在吹雪は現場から離脱したため、代わりに晴風は偵察へ向かえ、援軍が到着するまでなるべく隠密に行動せよ、万一攻撃を受けた場合は武器の使用を許可する、とのことですよ！」

鵜がブルマーメイドからの電文を報告する。

「国籍不明艦隊…艦長どうしますか？」

「とりあえず相手のリーダーに捕捉されないよう視程外にしよう！艦隊はスキッパーで接近して観察しよう！」

「なるほど、スキッパーは誰が乗りますか？」

「しろちゃん、お願いできる？」

「了解！」

「あれが国籍不明艦隊……」

ましろはスキップパーに乗り、艦隊が見えるギリギリのところから観察している。

「艦長、国籍不明艦隊はこちらに向かっています。移動したほうが良いかと。」

『わかった！とーりかーじ！』

『ここなら大丈夫だね！』

「あの一！こちらに向かっています！」

『ええ！?!なんで?!場所移動したばかりだよ!?!』

その後、何度移動しても晴風の方へ向かってきた。晴風の世界のリーダーは水平線の向こうの目標は捕捉できない。第1空母打撃群のリーダーはもちろん水平線の向こうの目標も捕捉できる。

つまり、晴風は第1空母打撃群を捕捉できていないが、第1空母打撃群は晴風を捕捉できているという状態になっている。

『…わかった。近づいて信号灯で交信してみよう。』

「そんな…危険です！」

『大丈夫、やってみよう。』

大和艦橋

「前方の駆逐艦から発光を確認！」

「読み上げろ。」

「はい！『本艦は日本国ブルーマーメイド所属航洋艦晴風である。貴艦の所属と目的を教えてください。』とのことです！」

「ブルーマーメイド？そんな組織はないぞ。それに晴風という艦も……」

村上は混乱していた。ブルーマーメイドという組織は歴史上一度も存在したことないし、陽炎型駆逐艦には晴風という艦は存在しない。つまりタイムスリップという線がなくなっただけなのだ。

「ブルーマーメイド!?!」

突如、大和航海長の澤島幸成が声を上げた。

「……どうした澤島?」

「ブルーマーメイドという組織も、晴風という艦も知っています！」

「本当か!」

「この世界は、ハイスクール・フリートという漫画、アニメの世界です！」

開戦

「アニメの世界？何を馬鹿げたことを…」

村上には澤島の言ったことが信用できなかった。それはそうだろう。誰だって自分が来た世界がアニメの世界だった、なんて話を信じることなんてできないだろう。

「いえ！では晴風と接触しましょう！あの艦の艦長は岬明乃という女子高生のはずです！」

「女子高生が駆逐艦の艦長だと？そんな話あるか！」

村上の疑念が一層深まる。

「まあいい、とりあえず信号灯を返そう。『我々は日本国防海軍第1艦隊所属第1空母打撃群である。ハワイ諸島で行われる海軍演習に向かう途中である。貴艦との接触を求め。』」

「…うちの国は海軍はないはずなんだけど…」

明乃が大和から発せられた信号灯を見ながら首を傾げる。

「しかもホワイトドルフィンの新鋭艦にそっくりな艦ばかり…」

「空母がいるってことは飛行船を運用してることに…」

「あれ？」

明乃はましろの一言であることに気付く。

「空母…もしかしてさっきのすごい速い飛行船ってあの空母のじゃ…」

「そんなまさか！あんなもの人間が作れるわけありません！」

ましろは明乃の発言を否定する。すっかり宇宙人の飛行船だと思ってしまうているようだ。

「とりあえず接触を求めてみたいだね。行ってみよう」

「ふええええ!!大丈夫なんですか!?!」

鈴が心配する。

「きつと大丈夫。ココちゃん、メイちゃん、ついてきてくれる?」

「はい!」

「もちろん!」

二人は返事をする。

「シロちゃん、艦の指揮をお願い」

「わかりました…気を付けてくださいいね?」

ましろが心配そうに明乃を見つめる。

「うん。行こう」

3人はスキップパ―にのり、第1空母打撃群へと向かう。

「あつ、あの空母で手を振ってる人が！あそこに行けばいいんですかね？」

3人は大和のクレーンで引き揚げられる。

「どうも、空母大和副長の花山弘文はなやまひろふみです」

花山が敬礼をしながら挨拶をする。

「は、晴風艦長の岬明乃です！」

明乃も慌てて敬礼をして挨拶をする。

「こちらへどうぞ。司令官が司令公室でお待ちです」

「は、はい！」

三人は花山に連れられ、司令公室を目指す。

「日本人だ……」

芽依が呟く。

「日本人ですね……」

幸子が返す。

「ホワイトドルフィンにこんな艦はないし……」

「ねえねえ！あれ女の人じゃない？」

芽依の指す方向には女性乗組員がいた。

「男女が同じ艦にいるなんて……」

明乃は驚く。この世界の日本はホワイトドルフィンとブルーマーメイドの二つの組織があり、それぞれ男女で分かれている。だから男女が一緒に乗艦している艦など存在しないはずなのだ。

「もしかして異世界から来た艦隊だったりして！」

また幸子の一人芝居が始まった。

「『君たちの危機を聞きつけて助けにきたぜ！』『きゃー！素敵！』『共にこの困難を乗り越えよう！』『はい！』」

「着いたよ」

花山の言葉で我に返る。そして司令公室の扉をノックする。

「入りなさい」

中から返答がくる。

「失礼します！」

花山は3人を引き連れ、中に入る。すると、

「あー！ほらやっぱり！」

中にいた澤島が声をあげる。

「晴風艦長の岬明乃さんですよね!」

「えっ!? そ、そうですけど…なんでそれを?」

「水雷長の西崎芽依さん! 記録員の納沙幸子さん!」

「おっ? 私たちそんな有名人なの? いやあーてれるなあー」

「たまにいるブルマーの熱狂的なファンの方でしょうか?」

澤島の発言に3人は驚いていた。

「司令! だから言ったじゃないですか!」

「まさか本当に…ああ私は日本国防海軍第1空母打撃群司令の村上淳仁だ」

「あの…うちの国は海軍はないはずなんですけど…」

明乃が尋ねる。

「それは私が説明します!」

澤島が説明し始める。

「我々はこの世界とは違う世界からきました。」

「やっぱり異世界からの艦隊だったんですね!」

幸子が喜ぶ。自分の妄想が当たっていたからだ。

「そして元いた世界では、この世界は漫画、アニメの世界として描かれていたんです!」

「ま、漫画!? アニメ!」

芽依が大声をあげる。

「ちなみに明乃さんが主人公だったんですよ！」

「うえ!?!私が!?!」

「おお!さすが艦長！」

「すごいですー！」

4人はすっかり会話に盛り上がっている。

「とりあえずこっちの世界とそっちの世界で何がどう違うのかを知りたいのだが…」

村上が割って入る。

「あっはい、じゃあ…何を説明すればいいんですかね？」

明乃が尋ねる。

「坂本龍馬が暗殺を逃れるところからの歴史についてだね。そこでこっちとそっちの世

界が分岐しているんだ。」

「わかりました。えつとですね…」

明乃が自分たちの世界の歴史について説明する。

「大戦が起きてない…」

花山は驚く。

「えつとそっちの世界について教えてもらえますか？」

明乃が尋ねる。すると、

「リーダーにて艦影を捕捉！3隻こちらに向かっています！」

「何？」

その報告を受け、花山達が艦橋へ移動する。しばらくすると3隻の艦影が見えてくる。

「あれは…秋月型か？」

花山が双眼鏡を覗きながらつぶやく。

「あつあれはホワイトドルフィン艦です！」

「ホワイトドルフィン？」

花山が尋ねる。

「はい！私たちブルーマーメイドの男性版組織です！」

「なるほどなら安心か？」

安堵したのも束の間、明乃が持っていたトランシーバーに通信が入る。

『艦長大変です！』

「？どうしたのシロちゃん？」

『ホワイトドルフィンの駆逐艦が強奪されたみたいで…艦番号は…！』

ましろが艦番号を伝える。

「え…それって…!」

明乃が双眼鏡で3隻を見る。

「該船飛翔体を発射!こちらに向かってくる!」

「何!?!」

圧倒的技術差

「あれは噴進魚雷だからほぼ100%よけられないですよ！」

「もうダメだあー！」

芽依と幸子が騒ぐ。

「噴進魚雷は誘導魚雷だから回避は……!!」

明乃が珍しくネガティブになる。それはそうだろう。回避が困難な魚雷が飛んできているのだから。

「秋月へ送れ！シースパローで迎撃せよ！」

村上の命令で秋月へ信号を送る。

「しーすばろー？」

明乃が首を傾げる。そこへ澤島が、

「あの艦を見てな」

3人に促す。すると、秋月からRIM-162 ESSMが発射される。

「噴進魚雷?!……でも相手撃沈しても私たちが助からないから意味くない!」

芽依がそう叫ぶ。

「まあまあ見てなって」

澤島が芽依を諭す。その間にもESSMは噴進魚雷の方へ飛翔していく。そして、
「な!？」

「えっ!?何が起こったの!？」

「爆発した!？」

3人は目を見開いて驚く。

「まさか……噴進魚雷に噴進魚雷を当てた!？」

「その通り。まあ当てたのは噴進魚雷じゃなくてRIM-162 ESSMという短距離迎撃ミサイルだけだね」

澤島が説明する。はいふりの世界にはミサイルは存在しない。だから3人にとって噴進魚雷を迎撃するその様はかなりの衝撃だった。

「正直有効射程ギリギリだったから不安だったが何とかなったな……」

村上の安堵の呟きを聞いた明乃が、

「あれって射程20kmくらいなんですか？」

そう質問する。

「ん?ああ、有効射程って言っても最短の射程であって実際は50kmはあるよ」

「(づ)、50km!?そんなに長いんですか!？」

3人は驚く。50kmという射程は大和（戦艦）の主砲の射程より長い。この世界でESSMの射程を超える種類の兵器は存在しない。

「そんなに驚くか？射程100km超えとか珍しくないだろう。」

「ひゃく……！」

3人は絶句する。大和の主砲の2倍以上の射程が普通だと言っているのだから当然だろう。

「ところであれって沈めていいんだよね？」

村上が明乃に尋ねる

「え？ああ、はい。一応海賊なので……」

そう、実は攻撃してきたのは海賊だったのだ。

「まあ主砲でいけるだろ。秋月へ主砲で迎撃するように伝えろ！」

秋月の主砲から砲弾が放たれ、全弾が海賊に命中する。

「ふう……これで一段落か。ところでなんで海賊があんな船を？あれを建造するにはまあまあな造船能力が必要だろう。」

村上が素朴な疑問を投げかける。

「えーつと……あの船は襲撃によつて拿捕された船なんです。今全世界で国際的的海賊組織が活動していて、私たちはその海賊と戦うために活動しているんです。」

「海賊か……」

しばらくしてレーダーに複数の艦影が映る。

「また海賊か？」

「にしては規模がでかすぎませんか？」

艦内がざわつく。戦闘態勢に就こうとしていたその時、明乃が持っていたトランシーバーに通信が入る。

『艦長、こつちにブルマー本隊が来ているみたいです。』

「それって西の方から接近してきている艦隊？」

『そうです。』

レーダーに映っていた艦影はブルマー本隊だった。30分程で本隊と合流し、ブルマーの隊員が数名大和に乗艦した。

司令公室

「日本ブルーマーメイド対海賊対処艦隊司令の宗谷真霜です。」

「日本国防海軍第1空母打撃群司令の村上淳仁です。」

互いに握手を交わす。

「話によると、あなたたちは異世界からやってきたと？」

真霜が晴風から事前に聴いていた話について質問する。

「私もよくわかってないんですけど、そうみたいですね……」

「異世界……」

ブルマーの隊員たちがざわつく。

「ところでこちらからも質問してもいいでしょうか？」

大和船務長の宇多孝昭うだたかあきが話に入ってくる。

「はい、何ででしょうか？」

「対空レーダーに100以上の機影が映っているんですけど、あれも貴方達の所属ですか？」

「え？確認します。」

真霜はトランシーバーで艦隊と交信する。

「……違うみたいです！あれは海賊です！」

その言葉により騒然とする。

「艦長どうしますか？我々はいつでも出撃できます！」

飛行長の白河用明しろかわもちあきが発言する。

「そうだな……第1戦闘攻撃飛行隊の出撃を命令する。」

「了解！」

白河は格納庫へと走っていた。

「私たちも飛行船を出しましょう。」

真霜がブルマーの隊員たちに話した。

「え？ 飛行船？」

村上はその言葉を聞き漏らさなかった。

「それって何ノット出るんですか？」

「えーつと、130ノットくらいですかね。」

「……」

130ノットといえば旅客機の離陸速度くらいの速さだ。そんな低速では戦闘機にはついて来れない。なので第1戦闘攻撃飛行隊が離陸準備をしている間に飛行船に当該空域へ向かってもらうことにした。

「あれは……さっきの飛行船かな？」

明乃がF-35を見つめてそう言う。しかしどう見てもF-35は飛行船には似ても似つかない。通常、飛行船は水素やヘリウムといった気体を利用して飛行するが、それらしきものは見当たらなかったため、明乃は困惑していた。

「さーて、ショータイムの始まりだ。皆さん、あの飛行船もとい戦闘機にご注目ください。」

第1空母打撃群の中で唯一はいふり世界に飛行機が存在しないことを知っている澤

島が臭いセリフを吐く。

F-35はアフターバーナーを点火し、離陸態勢に入る。そして、

「うわ!」

「なにあれ!?!」

電磁カタパルトによって射出され、離陸する。次々に離陸していくF-35。

「どうやって飛んでいるんだ!?!」

「なんて速さだ……」

「あの戦闘機は音速をも超えることができるんだ。」

「音速!?!」

澤島の解説にはいふり世界の住人たちは驚く。人が乗った乗り物が音速を超えるなどあり得ないというのが常識だからだ。人が乗った乗り物が音速を超えるな

皆がこれなら海賊にも勝てる、そう確信した。